

## 保育施設の情報を提供する有益な方法に関する調査結果が示唆する保育実践の新しいICTを用いた掲示方法の進化

【(保育)施設から施設利用中の保護者への情報提供の方法、一番有益な方法】

(n=4,531)

	情報提供の方法	一番有益な方法
保育施設から保護者へのお知らせ（通信やおたよりなどの配布物、施設内に掲示されるお知らせなど）	96.8	39.0
日々の保育士と保護者のやり取り（送迎時、連絡帳を含む）	93.6	51.3
保護者向けの行事（保護者懇談会や保育参観、保護者面談など）	70.6	2.0
保育施設が独自に発信する情報（ホームページ、地域の掲示板などに掲示されたお知らせなど）	31.3	1.0
自治体のホームページなど	4.3	0.0
その他	1.2	0.2
無回答	1.1	6.5
全体	100.0	100.0

（出典）日本保育協会「保育所等の情報公開・情報発信に関する調査研究 報告書」

<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000520272.pdf>

保育園などの保育施設と保護者との間では、様々な方法により、情報のやりとりがなされている。登降園時の会話に始まり、園からのお便りや連絡帳といった媒体、さらには、ホームページや日々の保育について綴ったブログによる情報発信を実践している保育園も希少な例ということではなくなっているだろう。

冒頭の表は、保育施設からの情報提供がどのように行われているか、そして施設を利用する保護者からみて、有益な情報提供方法がどのようなものであるかを厚生労働省の補助の下で「日本保育協会」が調査し、2018年3月に公表したものだ。

この調査では、保護者は、保育施設からの情報提供の主な手段を、「日々の保育士とのやり取り（送迎時、連絡帳を含む）」「保育施設から保護者へのお知らせ（通信やおたよりなどの配布物、施設内に掲示されるお知らせなど）」「保護者向けの行事（保護者懇談会や保育参観、保護者面談など）」と認識しており、ホームページなどを含む「保育施設が独自に発信する情報」の認知度合いは3割程度となっている。

さらに興味深いのは、保育士とのやり取りや施設からのお知らせは有益だと評価されている一方で、保護者懇談会などの保護者向けの行事については、ほとんど有益と評価されていないということだ。

この結果を筆者なりに解釈すると、個々の保育士との日常的なやり取りという個別性の高い情報提供が最も重視されており、それに次いで、施設を利用している保護者向けに、クラスや施設の情報を提供す

るといふ「中間的」な情報提供が評価されているということになる。広く一般に公開する情報提供は、進行形の利用者にとってはあまり有用ではないのだろう。というのも、この形態の情報提供は更新頻度が低くなりがちだからではなかろうか。この点、保護者向けの行事が情報源として評価されないのも、頻度が影響しているのではないかと推測できる。「たまにしか提供されない密度の濃い情報」よりも、「高頻度に更新される新鮮な情報」の方を高く評価しているということなのではなかろうか。

さて、個別的な情報提供に次いで、保護者から有益だと評価される「おたより」や施設内の掲示といった「中間的」な情報提供のあり方として、参考になるのが、レッジョエミリア・アプローチにおける「ドキュメンテーション」のあり方ではないだろうか。

レッジョエミリアとは、イタリアの都市の名称で、その地で行われている幼児教育保育に対して世界的に関心を持たれている。その詳細をこの場で記述することは紙幅の関係で行わないが、そのレッジョエミリア・アプローチの重要な構成要素の一つが、子どもたちの活動を記録化して、施設内、そして保護者と共有する「ドキュメンテーション」だ。

この「ドキュメンテーション」は、施設外に張り出されることもあるが、多くの場合は、施設内に張り出されて、保護者や関係者の閲覧の用に供される。

レッジョ型の「ドキュメンテーション」作成過程の特徴を筆者なりに2点にまとめると、「共同性」と「同時進行性」となるのではないかと考えている。

## I：共同性

ドキュメンテーションの作成は、複数の保育者（や専門的支援者）が共同作業で行うものとされている。

## II：同時進行性

記録の対象となるプロジェクトが完了してから、ドキュメンテーションを作成するのではなく、数カ月かけて実行されるプロジェクトについて、1週間ごとなど定期的にドキュメンテーションを作成する。そのドキュメンテーションを、子ども自身を含む関係者が閲覧し、プロジェクトの進行方向を修正する。そして、次のステップのドキュメンテーションが作成される。このように、プロジェクトとドキュメンテーション作成が同時進行となっている。

共同作業、記録すべき事象との同時進行という「ドキュメンテーション」作成過程の特徴は、実はICTとの親和性が高いのではないかと考えている。同時進行で共同作業ということは、完成形を目指すというよりも、何度も作り直すことを当然の前提としている。従来の紙ベースの作成過程でもやり直しはできるが、コンピュータを用いてデジタルで管理すると素材の入れ替えや記述の見直しのコスト負担は格段に低くなる。また、音声や動画を交えた「掲示」をすることは紙では不可能で、コンピュータとモニターを利用せざるを得ない。

レッジョ型の「ドキュメンテーション」は、第2次世界大戦後から営々と試行錯誤が積み重ねられ、1990年代から世界的に注目されてきた、必ずしも新しい試みではない。ただ、レッジョ型のドキュメン

テーションは、ICT、コンピュータの力を用いることでこそ、真に定着する技法になるのではないかとと思われる。

先に述べたように、保護者は、「高頻度の情報提供」、つまり鮮度の高い園児や施設の情報に高評価を与える。とすれば、そのような情報の鮮度を保つためには、コンピュータを活用することが不可避だろう。言い方を換えれば、昨今の各種 ICT の進歩が、やっと子どもを中心に据えた保育実践を高頻度で記録化できるレベルに到達しつつあるということなのだろう。

やっと普及帯に降りてきた高精細な 4K モニターや AI の技術を活用して、保育施設と保護者の「中間的」な情報共有の方法を進化させるべく、保育実践の新しい「揭示システム」の研究、試行を進めていくことが必要なのだと確信している。

●当レポートは、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。当レポートのご利用に際しては、ご自身の判断にてお願い申し上げます。また、当レポートは執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。なお、当レポートに記載された内容は予告なしに変更されることもあります。